

課題研修カウンセリング① 簡易講演録

■実施日時：令和 7 年 6 月 2 日（金）14:00～15:35

■開催形式：Zoom によるオンライン開催

■講師：富田久枝氏（千葉大学名誉教授）

■テーマ：教員が使えるカウンセリング技術 基礎編

■主催：公益社団法人東京都専修学校各種学校協会

本研修では、長年にわたり教育現場におけるカウンセリング支援や特別支援教育に携わってきた富田久枝氏を講師に迎え、学校現場におけるカウンセリングの基本的な考え方と技法、そして教員として求められる対人支援の姿勢について、多くの事例と理論を交えながらご講義いただきました。

■カウンセリングの定義と基本姿勢

冒頭では、「カウンセリングとは、相手の行動変容を促すための人間関係であり、教育の一部として機能する営みである」との定義が示されました。カウンセリングは医療的な“治療”ではなく、“心を尽くす教育”であり、教員一人ひとりの対応の中にすでにカウンセリング的要素が含まれていることが強調されました。

講義の中では、國分康孝先生の定義にも触れられました。國分先生は「カウンセリングとは、コミュニケーションによって、相談者の自己成長や問題解決を促す人間関係である」と述べており、富田講師もこの考え方に強く共感を示されていました。教員と学生の関係もまた、日常の中でこうした援助的関わりを体現できる重要な場であると位置づけられました。

また、「共感性」「受容性」「非審判性」というカウンセラーの基本態度に加え、「やさしさ」「思いやり」「強さ」の 3 つの態度が紹介され、支援者としての人間的な在り方の大切さが語られました。特に、日々学生と接する教員が「カウンセリングマインド」を意識して関わることで、学生が心を開くきっかけになると強調されました。

■面接技法と理論的背景

研修の中盤では、カウンセリングにおける「面接技法」として、呼びかけ面接・チャンス面接・押しかけ面接など、型にとらわれない柔軟なコミュニケーションの取り方が紹介されました。面接の場が必ずしも相談室である必要はなく、廊下や教室など日常的な場面での声かけや関係構築の重要性が説かれました。講師自身の豊富な現場経験に基づくエピソードが紹介され、実践的な視点を持って理解を深めることができました。

さらに、来談者中心療法、精神分析理論、アドラー心理学、論理療法、交流分析（エゴグラム）など、代表的なカウンセリング理論の基礎が紹介され、理論と技法の関係性を理解することの大切さが語られました。「自分が納得できる理論をひとつ持つておく」と、支援の軸になる」との言葉が印象的でした。

講師はまた、特に専門学校のような多様なバックグラウンドを持つ学生が集う場では、理論を踏まえた柔軟な対応が求められると強調しました。例えば、ロジャーズの来談者中心療法をベースにした“傾聴”を基本としつつ、相手の反応に応じて行動療法的なアプローチ（段階的接近法やモデリングなど）を取り入れることで、実際の学生支援の場面で効果的な対応が可能になると述べました。

■アセスメントと支援の考え方

講義の後半では、「アセスメント（総合的評価）」の考え方が詳しく紹介されました。学生の心理的課題は、学習面や家庭環境、身体的特性などさまざまな要因が絡み合って表出するものであり、表面的な言動だけで判断せず、多面的に理解することの重要性が説かれました。アセスメントでは心理テストや観察、面接の記録などを用いながら、援助者自身のバイアスを排除する姿勢も求められました。

■発達障害と支援の視点

発達障害の基礎知識にも触れ、「支援が必要な学生は誰か」ではなく「どの学生にも支援が必要である」というインクルーシブな視点を持つことの重要性が提示されました。特殊教育から特別支援教育への歴史的転換や、ADHD や ASD を含む発達障害の実践的な理解についてもわかりやすく解説され、専門性の高い内容を基礎から学ぶ貴重な機会となりました。

とりわけ、専門学校における ASD や ADHD の学生への配慮として、曖昧な表現を避ける・視覚的な支援を加える・スケジュールや手順を明確に伝えるといった工夫が紹介されました。また、感覚過敏など“見えにくい困難さ”に気づける感性を教員が育むことの重要性が説かれました。

■まとめ

本研修は、教員が「一人の人間として、心を傾けて学生に向き合うこと」の大切さを思い起こさせる内容でした。日常の中にカウンセリング的要素を取り入れ、特別な支援を要する学生にも自然に関わるための基礎知識と態度を身に付ける導入編として、大変有意義な機会となりました。